

タヌキは、人里近くに生息する知名度の高い哺乳類であり、歴史的・文化的にも私たちとかかわりの深い存在です。では、実際のタヌキは、一体どのような生活をしている、どのような生き物なのでしょうか・・・？

## 身近な哺乳類 タヌキ



竹林で撮影されたタヌキ（○内は證誠寺のモニュメント）

タヌキは多くの民話にも登場する身近な哺乳類です。千葉県でも木更津市のしょうじょうじ證誠寺でのタヌキの民話が全国的に有名です。また、実際のタヌキも庭に出没したり、道路で見かけたりするなど目撃する機会が多い動物でもあります。

しかし、世界的にみると分布が限られており、珍しい哺乳類という一面もあります。今回は身近にいるけれどあまり知られていないタヌキについてご紹介します。

### CONTENTS

- 1 身近な哺乳類 タヌキ ..... 1
- 2 生命のにぎわい調査団 現地研修会を開催しました ..... 3
- 3 千葉県生物多様性ハンドブック2「外来生物がやってきた」を改訂しました ..... 4
- 4 千葉県の外来種（ガビチョウ） ..... 4



## ◎タヌキの基本

タヌキは哺乳綱食肉目イヌ科タヌキ属に分類されています。ずんぐりしていますが、キツネやオオカミに近い仲間です。本来の分布は日本を含めた東アジアですが、近年ではヨーロッパに持ち込まれたタヌキが飼育施設から逃げ出して野外に外来種として定着し、分布拡大しています。日本には北海道に分布するエゾタヌキと、本州・四国・九州に分布するホンダタヌキの2亜種が生息しています。

頭胴長（鼻の先から尻尾の付け根までの長さ）は50～60cm、体重は季節によって変動しますが、平均4kg程度です。夫婦で子育てすることで知られており、繁殖期は冬です。妊娠期間は2ヶ月で春に4～6頭の子どもを産みます。子どもは秋ごろに親から別れて分散します。秋から冬にかけてタヌキの交通事故をよく見かけますが、多くが若い分散個体です。

## ◎どこでも暮らす何でも食べる

日本に広く分布するタヌキは、標高1,000m以上の亜高山から千葉県のような低地まで様々な環境で暮らすことができます。また、森林や里地だけでなく都市部でも緑地があると暮らすことができるため、千葉県立中央博物館がある青葉の森公園周辺でも暮らしています。その暮らしぶりは、基本的には昼は休息し、夕方から早朝にかけて活動しているようです。休息には地面の穴などを利用しますが、タヌキは穴を掘れません。アナグマの巣穴を利用することがあり、その様子が「同じ穴のむじな」の語源と言われています。

暮らす場所にこだわりを持たないタヌキですが、食べ物にもこだわりはなく、果実から昆虫、残飯まで何でも食べます。千葉県での調査結果では、一番多く食べていたのは節足動物でしたが、それ以外にも種子や果実から哺乳類、魚類、残飯まで多様なものを食べていました（松尾他、2007）。

## ◎タヌキを見つける

身近に暮らしているといっても、基本的には夜行性の動物なので、姿を見るのはなかなか難しいです。しかし、痕跡（フィールドサイン）を見つけることで間接的にタヌキがいることが分かります。見つけやすい痕跡は足跡です。日本で暮らす中型食肉目の指の数は4本か5本です。イヌ科とネコ科は4本、

それ以外は5本です。他のイヌ科との見分け方は、タヌキの足跡が直径4cm程度に対して他のイヌ科はそれ以上に大きいことが普通です。また、タヌキの足跡は、その形から「梅の花」とも言われます。ネコとの区別は、イヌ科は爪を引っ込めることができないのに対し、ネコはできるので、爪痕があればタヌキになります。



タヌキの足跡

他には、ため糞があります。タヌキは決まった場所に糞をする習性があり、それで情報交換していると考えられています。アナグマもため糞をしますが、少し地面を掘って糞をします。また、アライグマなどもため糞状になりますが、いつもではありません。



タヌキのため糞

普通種であるため、普段は注目されないタヌキですが、その痕跡を見つけてタヌキを感じ、少しの間、タヌキに思いを馳せていただければと思います。

（金城 芳典 千葉県生物多様性センター）

いのち  
**生命のにぎわい調査団  
現地研修会を開催しました**  
令和6年7月6日(土)

今回の研修会は椿TC里山バンク（酒々井町）で夏の谷津田に暮らす生き物を観察しました。当日は晴天に恵まれ34名の団員にご参加いただきました。

講師には、現地で里山活動を行う株式会社椿ファームの川村さんを迎え、谷津田の成り立ちや景観について解説いただきました。



観察会の様子

◎谷津田に生息している動植物

谷津田とは、「谷津」と呼ばれる台地や丘陵地が浸食されてできた谷状の地形を利用して造られた水田です。谷津田を含む里山は二次的自然といい、人が手を加えることで特有の自然環境が維持されています。椿TC里山バンクでも樹木伐採や草刈等が適宜行われ、里山環境を維持し続けていることにより、様々な動植物の生息・生育場所となっています。



川村講師による谷津田の解説

研修会当日には、レッドリスト選定種を含む希少な植物を各種観察した他、アズマヒキガエルやシュ

レーゲルアオガエルなどの両生類、多数の昆虫類も見られ、人の手が適切に入った里山ならではの生態系をみることができました。

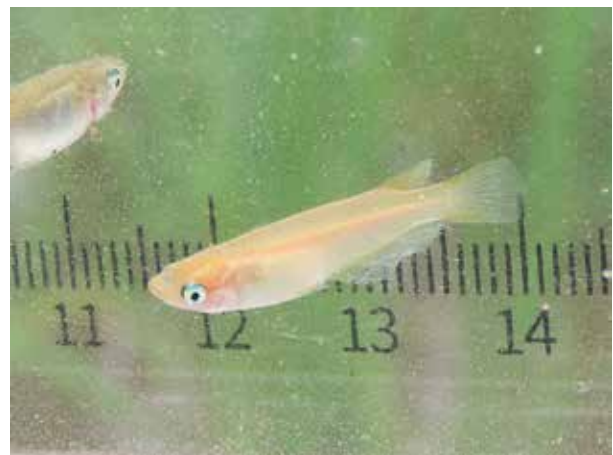


アズマヒキガエル

◎外来種について

一方で、在来種だけでなく外来種も数多く見られました。水田ではスクミリンゴガイ（通称：ジャンボタニシ）の卵、湿地帯では特定外来生物のオオフサモ、また、フィールドの全域にわたってヌマガエルが観察できました。ヌマガエルは元々、本州中部以西に生息する在来種ですが、千葉県にいるものは1990年代以降に関東地方へ侵入した「国内外来種」です。

また、用水路では、人為的に作られた観賞魚メダカ品種のひとつであるヒメダカが泳いでいました。どのような経緯で椿TC里山バンクへ侵入したかは不明ですが、飼育されたものが逃げたもしくは放流された可能性が考えられます。



ヒメダカ



今回の研修会では、夏の谷津田に暮らす希少な生き物たちを観察できた反面、その谷津田の現況として、様々な外来種の侵入を体感しました。参加された方からは、人が手を入れていることで守られていると教えられた、周辺にこのようなところがあったとは知らなかった、など様々な感想をいただきました。

次の研修会は秋に実施予定です。皆さまのご参加をお待ちしております。

(佐藤 哲也 千葉県生物多様性センター)

## 千葉県生物多様性ハンドブック2 「外来生物がやってきた」を改訂しました

外来生物の問題は、テレビで特集が組まれるなど一般の方にも触れる機会が増えてきています。その一方で、外来生物がどのようなもので、どのような影響を及ぼすのかなどについては、まだ理解されていない側面があります。

そこで千葉県生物多様性ハンドブック2「外来生物がやってきた」では、実は身近で深刻な問題である外来生物を取り上げ、その問題点、対処の仕方、参考資料情報の入手などを分かりやすくまとめた冊子として平成23年に作成、これまで第3版まで発行しています。前回の改訂から8年が経過し、外来生物を取り巻く状況も大きく変化しました。そこで内容の大幅な見直しを行い、このたび第4版を発行しました。

本書は冊子で配布しているほか、生物多様性センターのホームページ

<https://www.bdcchiba.jp/handbook>

からダウンロードできます。

ぜひ、ご覧いただき対策などの参考にいただければ幸いです。(金城 芳典 千葉県生物多様性センター)



## 千葉県の外来種

### ガビチョウ



環境省の鳥類標識調査で捕獲されたガビチョウ（雌・成鳥）  
2024年6月16日 千葉県野田市（撮影：小田谷嘉弥）

ガビチョウは、スズメ目チメドリ科（またはガビチョウ科）に属する、ヒヨドリやムドリと同じくらいの大きさの小鳥です。全身赤褐色で、目のまわりに勾玉型の白い模様があるのが特徴です（写真）。丘陵地や台地の明るい森林や藪に生息し、地上近くで採食します。ほとんど渡りをせず、春から夏にかけて繁殖し、朗らかな大きな声でさえずるのが聞かれます。

本種は中国や東南アジアが原産ですが、江戸時代から飼い鳥として日本国内に持ち込まれていました。野外では、1980年代以降に九州や山梨県で発見され、その分布を徐々に広げています。千葉県では、近隣地域にすべて定着がやや遅れていましたが、2020年前後から確認例が多くなり、現在では銚子市や鴨川市などでも記録されています。中央博物館のある千葉市中央区の青葉の森公園でも、2024年の6月に初めて確認されました。全国的にこれから個体数が増えていくものと予想されます。

ガビチョウは環境省の特定外来生物に指定されていますが、日本国内の在来生態系に与える影響については、まだあまりよくわかっていません。しかし、近縁のソウシチョウでは、繁殖密度が高まることによって捕食者が誘引され、同様の環境で営巣するウグイスの繁殖成功率が低くなっている可能性が指摘されています。また、山梨県で行われた最近の調査で、実験的に設置された、モズなどを模した巣からガビチョウが卵を抜き取る行動が観察されており、在来種の直接的な捕食者となる可能性も指摘されています。本種を含む小型の鳥類は、移動能力が高く捕獲が難しいため、分布拡大を防いだり、野生個体の除去を行うことは難しいのが現状ですが、その在来種への影響を注意深く見守っていく必要があるでしょう。

(小田谷 嘉弥 千葉県立中央博物館)



生物多様性ちばニュースレター No.83 令和6年9月30日発行

編集・発行

千葉県生物多様性センター（環境生活部自然保護課）

〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2（千葉県立中央博物館内）

TEL 043(265)3601 FAX 043(265)3615 URL <https://www.bdcchiba.jp>

リサイクル適性(A)  
この印刷物は、印刷用の紙へ  
リサイクルできます。